

『石は なにから できている?』感想

・石、石、いろんな色。いろんな形。つぶつぶが見える?そのつぶつぶはキラキラしてる?子どもにも分かりやすい特徴が、ほら科学の入口。虫めがねと釘を持って、すぐにでも川原や海岸へ行きたくなる一冊です。

・スケールが大きくて、足元の石に丁寧に目が注がれていて、本を手に取った人の心に染み透る。地味だけれど素朴で純粹。共感と満足が感じられて何度も手に取りたくなるのです!石の名前を全面に出さずに静かに宇宙に目を向けたいくなる編集は今までになかった視点だと思いました!!!感動しました。

こんな本がほしかったし、そばに置いて迫力ある拡大写真を飽きもせず眺めています。心が「満足!」って言っています。

・石の名前をあえて最初に載せないことで、写真の石そのものを子どもたちが「この石なに?」とまじまじと見てくれます。本当に素敵な本です。私も買おうと思っています。

・この本、いいですね。小学校で理科専科をしています。発達障害を持つ子どもが多く、校庭で何時間も、貝殻や変わった石を集めている子もいます。そういった子どもたち向けの、本を探していました。この本ぴったりです。ほかに理科に関する、このようなおすすめの本があったら教えてください。たくさんあるとありがたいです。

・西村さんの新刊の『石はなにからできている?』は本当に子どもの心をつかむ素晴らしい本で、勤務先の図書館の先週の新刊選書会議で市川が絶賛して良さを熱く語ったら全館購入の勢いです。さっそく、区内の小学校の購入お勧め本のリストにも入れました。石好きの児童が多いのでどんな反応をするか楽しみです。

・やっとゲットしました。

きれいな本ですね。文章は詩のようでリズムカルに読みたくなります。後の解説もとてもわかりやすいです。幼児の頃から石拾いして遊んでいた小2の孫に贈りたいです。

・ほんと、いい本ですねー！

言いたいことだけに絞ってそれを見事に表現されていて、素晴らしいです。学校の図書館にこのシリーズを買ってもらおうって思いました。

朝日新聞「子どもの本棚」書評 2018,10,27

この絵本を読んで、身近にある石ころがこんなにも美しい色をしていたのかと改めて気づかされた。月の石が灰色ばかりなのに比べて水の惑星である地球の石の色は何て豊かなことかと驚く。まさに「石ころは地球に咲く花」ということばがぴったりだ。

石の表面のつぶつぶやキラキラなどから、石のことをもっと知りたくなる写真絵本。
(ちいさいおうち書店店長 越高一夫さん)

・ボクにとっては、「理科」の諸分野の中で、いくらやっても苦手意識の消えない「石」の分野ですが、それでも、研究会仲間である西村さんには何度か直接お話を聞いて、少しずつ何かがつかめたような気がしていました。

それでも自分の中でなかなかストーンと落ちなかったのに、この本を読んで、かなりすっきり整理されてきたような気がしています。どうしてだろうと考えてみると、どうやらそれは、「基準をはっきりさせてきちんと分類していくところ」だろうと思えました。

短い文章だけど、写真とじっくり合っていて、とても分かりやすく書かれています。あとの解説もとても明快で、読んでいてすっきりしています。

通勤の帰りの電車の中で、一気に読み終わりました。ほんとにすてきな「絵本(写真だけ)」だと思いました。(元高校理科教師)

・石って、こんなに魅力的なんだ！

今まで、石なんて全く興味がなかったのですが、これなら、私も子どもも幼児でも石に夢中になれそう。写真がとても大きくて、リアル。また今までにない分類法で、玄武岩とか安山岩とか、そういう言葉がいっさいなくてびっくり。小学校とかでこれを使って教えてほしい。あとがきの「あなたの見ている石は、ひょっとして、恐竜が生きていたときの石かも」→小さい子どもたちにそう言うてから、この本を読ませようかな。

本を手にとって、まず帯に「あれ？」と思いました。石の本に月の話？石ころはたいがい足元に転がっていて、月を想いながら石ころを眺め

たことはなかったからです。本のページを開く前に、何か大きな世界観を提示されたようで、石ころを見る目が一気に広がった気がしました。灰色の月の世界から一転、色彩溢れる河原、水の音が聞こえる地球に映像が切り変わる。そこで「石はなにからできている？」と問いかけられる見事な構成に思わず「すてき」と唸りました。ページを繰っていくと、月の石や月面の写真があり、紙面から大きくはみ出した石の拡大写真があって、最後にまた宇宙が現れる。地球を宇宙から眺めてみたり、河原の石ころにぎりぎりまで接近してみたり、まるでグーグルアースで地球と宇宙を飛び回っているようなダイナミックな躍動感を感じます。動かないありふれた石の写真を並べた絵本のはずなのに、見るものを引き込む構成のトリックに、心が共鳴するのがわかりました。

「あ、この石、よく見る！」というような普通の石ころなのに、「きれい！」と心ときめくのはなぜでしょうか。ぜいたくにも紙面いっぱい拡大した写真の中に、宝石のような粒々がくっきりと写っている、一つ一つの写真がとてもシンプルで美しく、見る者にぐんぐん迫ってくるからでしょうか。こんなふうじつくり石の表情を見ることはなかったなあ、と飽かず眺めたくなる写真の数々。特に珍しくない石ころだから余計親しみを感ずります。

石の名前を前面に出さずに静かに宇宙に目を向けたくなる編集は、今までになかった視点だと思いました。様々な石の表情を丁寧に追いながら、地球の不思議を静かに語りかけてくる絵本。何気ない石が宇宙に導いてくれる絵本も小さな石ころが宝物に見える絵本。動かない石が生き生きと語りかけてくる不思議な魅力に満ちた石の絵本です。石ころの絵本がくれた心地よい感動に心満たされ、絵本の写真を飽かず眺めています。ますます石ころが好きになりました。

作者と、写真家さんと、構成さんとの見事なコラボレーションが生きている素敵な絵本だと思います。(元小学校教師)

月の石の写真から始まる本書は、「キラキラしたつぶつぶが見える、白っぽい石」「つぶつぶはあるが、キラキラしない石」など、誰もがわかる表現で、身近な石が紹介され、その成り立ちが説明されています。そして、海辺の石に続き、宇宙から見た地球の写真で終わります。写真が魅力的で、石を通して私たちが生きている地球の長い時間を想像することができる科学絵本。巻末には、花崗岩などの名称や分類などの説明も書かれています。(児童文学者)

